横浜医学，72，567-578（2021）

その他

がんと癌とで意味が異なるか
―過去四十年間の学術書の文献的検討―

藤　田　浄　秀[1)]，座　間　正　和[2)]

[1)]逗子病院　内科

[2)]逗子病院　放射線科

Key words:　医学用語，がん，癌、癌腫，当用漢字

Ⅰ．緒　　言

腫瘍は，良性腫瘍と悪性腫瘍とに分類され，後者は癌cancerと呼ばれる．癌は，癌腫carcinomaと肉腫sarcomaとに分けられる．癌腫の診断名は，通常癌腫の腫が省かれて，舌癌・乳癌・胃癌・．．の様に「臓器名＋癌」で，あるいは扁平上皮癌・腺癌・．．の様に「組織名＋癌」で表記される．従って，悪性腫瘍の総称としての癌は「広義の癌」，癌腫の診断名としての癌は「狭義の癌」という事になる．

ところで，戦後の漢字施策で当用漢字が定められ，当用漢字以外の漢字使用に強い制限が設けられ，広く当用漢字使用の忠実な遵守が求められた．当用漢字施策下での漢字制限の為に，当用漢字に含まれなかった「癌」は漢字を用いる事が出来ず，「がん」と記さなければならなかった．行政や公的性格の強い報道機関等は忠実にこれに従った．

しかし，医学では漢字の「癌」を用い続けた．その結果，医学では「癌」を，医学以外では平仮名の「がん」を使用する二本立ての状態がしばらく続く事となったが，次第次第に医学で「がん」も使用される様になった[1)]．

「癌」を単に「がん」と表記するだけならば何ら問題は起こらなかったと思われるが，「がんは悪性腫瘍の総称を意味し，癌は癌腫を意味する」と，がんと癌とで意味が異なるとする主張が現れた．日本癌治療学会は，学術用語統一の重要性の見地からがんと癌とで意味の違いがあるとする主張に対して繰り返し否定的見解を明らかにしている[2,3)]が，数十年来この主張は時々頭をもたげ，ある学会の悪性腫瘍の定義にまでなっている[1)]．

本稿の主目的は，平仮名の「がん」は悪性腫瘍の総称を意味し、漢字の「癌」は癌腫を意味するとする考えが本当に医学の世界で市民権を獲得しているか否かを確認する事である[1)]．その目的の為に過去四十年間に出版された病理学・悪性腫瘍関連の学術書において，「がん」と「癌」とがいかに使用されているかを文献を収集して検索した．

その検索結果，「がん」と「癌」との使用に関して，「がんは悪性腫瘍の総称で，癌は癌腫を意味する」とする考えは，現在の医学においては極めて少数で例外的であるとの結論を得たので報告する．

Ⅱ．文献の収集

コロナ禍の為に，昨年来他大学の図書館を利用する事が不可能であり，今後の見通しも全く立たない状況に鑑みて，「がん」と「癌」とがどの様に使用されているかを知る為に，横浜市立大学医学情報センター（医学部図書館）並びに有隣堂横浜駅西口店・紀伊國屋書店横浜店の店頭に並べてある病理学の成書および癌（がん）に関連する基礎的並びに臨床的学術書，医学各領域の癌診療ガイドライン，口腔外科学の成書等の文献を収集して検索し，A．悪性腫瘍の総称にも癌腫の診断名にも総て「癌」が用いられている文献，B．悪性腫瘍の総称にも癌腫の診断名にも総て「がん」が用いられている文献，C．悪性腫瘍の総称には「がん」が、癌腫の診断名には「癌」が用いられている文献，D．その他のA～Cのいずれにも属さない文献の四群に分類して，各群の特徴をまとめた．

藤田浄秀，神奈川県逗子市桜山四丁目１番20号（〒249-0005）逗子病院　内科

2. 癌腫の名称

癌腫 cancer Krebs，という名称の由来は，わが国では 乳癌の外観があたかも岩石に似て塁々としていることに その起源をもっている．もともと 岩，巖，嵒，嵒 などの文字があてられてきたが，後にこれに 疒 を付けて 癌 におちついたものである．欧米の cancer，Krebs，carcinos なども また 乳癌をみてつけられた名称であるが，それは皮下にできた腫瘍結節が皮膚を押しあげ，そこから周囲に向かって走る怒張した血管を伴った乳癌の形状が蟹に似ているというところに由来している．なお ついでであるが cancer またはわが国の癌という 名称を 悪性腫瘍全般の代名詞として使用される場合があるので注意せねばならない（腫瘍の名称の項 p．396 参照）．

近年 悪性腫瘍全般を 癌（または ガン）とよび，癌腫 および肉腫ならびに 悪性混合腫瘍のすべてを包含する意味に用いられることが多く，この意味の癌（またはガン）と上皮性の悪性腫瘍を意味する癌腫との字義に多少の混乱をきたしている．そこで日本癌学会幹事会では悪性腫瘍の用語の基準をつぎのように使用するよう申し合わせた（昭和 34 年 6 月 27 日）．

1. 癌（またはガン）は一般に悪性腫瘍を代表する（癌腫，肉腫 などの他を含めて）．
2. 単語のはじめに癌のあるときは，一般に悪性腫瘍全体を意味する．
   例：癌化，癌悪液質，癌反応 など．
   とくに癌腫，肉腫を指定するときには腫を入れる．
   例：癌腫化，癌腫悪液質，肉腫化 など．
3. 単語の中間に 癌のあるときも一般に 悪性腫瘍全体を意味する．
   例：発癌率，抗癌剤．
   とくに癌腫，肉腫を 指定するときは 発肉腫率，発癌腫率などとする．
4. 単語の最後に癌のあるときは一般に癌腫を意味する．これは主として臓器名，組織名 などが冠せられることになるが，3の他の形容詞が冠せられても同様癌腫を意味する．
   例：子宮癌，扁平上皮癌，大細胞癌，硬癌，髄様癌 はいずれも癌腫のみを意味する．
   しかしこのさい腫をつけても差し支えない．

付記：血液癌，骨癌 などの使用をさけ，血液肉腫，骨肉腫とすることが望ましい．

悪性腫瘍
- 癌（ガン）
  - 癌— 癌腫・{—癌
  - 癌— 肉腫・{—肉腫 / 肉腫— / —肉腫
  - —癌
- 良性腫瘍＝ —腫
- 腫　瘍＝ —腫

図1
上：癌腫に cancer, Krebs を対応させている．
下：日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ
文献5）より引用

各群の文献は基本的に年代順に並べたが一部例外もある．必要に応じ最新版の他に旧版も拾い挙げた．

検索し得た文献数は必ずしも多いとは言えないが，「がん」と「癌」との使用に関するおおよその傾向は把握出来たと思われる．

Ⅲ．検索結果

各文献の要点を個別具体的に詳しく記載する紙幅の余裕が無いので，いかに考えて分類したかが分かるように，幾つかの文献に関して簡単に注を加えた．

日本癌学会は，仮名の使用も認めているが，本来的には悪性腫瘍の総称にも癌腫にも「癌」を用いているので，悪性腫瘍の用語使用基準申合せを載せている文献は，A群に分類した．

A群．悪性腫瘍の総称にも癌腫の診断名にも総て「癌」が用いられている文献[4－47]

病理学総論[5]

「癌腫cancer，Krebs」とし，「cancerまたは我が国の癌という名称を悪性腫瘍全般の代名詞として使用される場合があるので注意せねばならない．」と記述されている（図1上）．昭和三十年代後半に既に癌cancerは癌腫carcinomaと肉腫sarcomaとに分類されると教えられた筆者にとって，昭和六十年発行の成書にかような記載があるのは驚きであるが，第1版は昭和三十五年であるので旧い記載の一部が残ったのであろうか．しかし，日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ（図1下）が掲載されているので，この群に分類した．

現代病理学大系[6]

「通常“癌”あるいは“がん”cancerという言葉は癌腫だけでなく肉腫を含み，悪性新生物malignant neoplasmsを総称している．」と定義している．

新病理学総論[7]

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ「1）癌『がん』は悪性腫瘍を総称する（癌腫，肉腫を含む）．」が掲載されている．

病理学総論[8]，**基準病理学総論**[9]，**病理学**[12]，**病理学**[20]

これ等では，悪性腫瘍は癌腫と肉腫とに分類されると定義され，定義に際して癌 がん cancerの何れも用いられていないが，本文中では「癌と素因，小児期の癌は癌腫より肉腫の方が多い[8]」「ある種の癌では（195頁），発癌因子（224－228頁）において化学発癌物質で白血病や乳

癌，肉腫などの誘発[9]」「あるいは発癌物質・発癌機序・癌遺伝子[12,20]」等，総称にも癌腫にも「癌」が使用されている事が確認できたので本群に分類した．

要説病理学[10]

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ「①癌，がんは癌腫（carcinoma，cancer）と肉腫（sarcoma）を含む悪性腫瘍（malignant tumor）の総称である．」が掲載されている．

新版　病理学入門[11]

「悪性の上皮性腫瘍を癌腫（carcinoma）と呼び，悪性の非上皮性腫瘍を肉腫（sarcoma）という。『がん』（cancer）は悪性腫瘍全体を指す言葉である。」の記述があるが，他の箇所では癌化・環境癌・職業癌・医原性発癌・．．等癌腫・肉腫を含めた悪性腫瘍の総称に「癌」が使用され「がん」は使用されていないので，本群に分類した．うっかり先入観に捕らわれて読み取るとC群に分類してしまう可能性があった．

病理学[13]

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ「１）癌（がん）は一般に悪性腫瘍を代表する（癌腫，肉腫を含めて）。」が掲載されている．

新版　要説病理学[16]

4.1特に癌と肉腫の構造上の注意（208頁）の小見出しが認められ，「癌は上皮性の悪性腫瘍であるので」の文言も有る．しかし，「一般に悪性腫瘍を癌（cancer）と総称するが，厳密には上皮性悪性腫瘍は癌腫（carcinoma）（206頁）」の記載が有る．

病理学概論[18]

「上皮性の悪性腫瘍を一般に癌（cancer）といい，非上皮性の悪性腫瘍を肉腫（sarcoma）と呼んでいる．」と記載されているが，本文の他の箇所では発癌・癌細胞・癌の潜伏期・発癌物質・癌ウイルス・．．等の記載が有るので本群に分類した．

現代の病理学[19]

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ「１）癌“がん”は悪性腫瘍を総称する（癌腫，肉腫を含む）。」が掲載されている．

新病理学総論[22]

「悪性腫瘍malignant tumorはまた癌（がん）cancer，Krebsともいい，」と定義されている．

医系病理学[23]

「悪性腫瘍のうち上皮性であるものは癌腫carcinoma，そして非上皮性であるものは肉腫と命名されている．（439頁）」と定義され，定義に際して癌 がんcancerの何れも用いられていない．しかし，B．腫瘍発生の原因は？　2．外因　において悪性腫瘍の総称を意味する「癌」の用語が間違い無く用いられている．

カラー版 アンダーウッド病理学[24]

「『癌』という言葉は（中略）通常，悪性の腫瘍あるいは新生物を意味する。（208頁）」と記載されている．

ルービン　カラー基本病理学　初版[27]，原書第５版[34]

「（対照的に，）悪性腫瘍malignant tumorすなわち癌は」と記載されている．

抗癌剤の選び方と使い方[28]

編者は愛知がんセンター名誉総長であるが，抗癌剤と癌を用いている．

最新病理学・口腔病理学[29]

歯科大学（歯学部）で教えられる口腔病理学の成書で，悪性腫瘍の定義は「癌」と記載されている．

歯学生のための病理学[32]

Ⅰ．において「悪性腫瘍（総称して『がん』という）（154頁）」，Ⅳ．において「悪性腫瘍を総称して『がん』（癌）という．（166－167頁）」の記載があるが，細胞の癌化の機序：癌遺伝子と癌抑制遺伝子，発癌の多段階説，癌と免疫，．．等の記載があり，扁平上皮癌・上皮内癌（*carcinoma in situ*）（166頁）の記載も有り，総称にも癌腫にも癌が使用されているので本群に分類した．

分かりやすい病理学[35]

「『癌cancer』という言葉は普通，悪性腫瘍全体を指すが，胃癌，子宮頸癌または扁平上皮癌などの様に用いれば癌腫を表す．なおこれらの命名法には例外も多い（80頁）」と記載されている．すなわち，癌には広義（総称）と狭義（癌腫）との意味が有る事を述べている．

ルービン　カラー病理学[36]

「遠隔部に拡がるものはmalignant tumorまたは癌cancerと称される．」と記載されている．

癌化学療法ハンドブック 2018[38]

肺癌，乳癌，．．等の他に，第11章 悪性黒色腫，第12章 白血病，第13章 多発性骨髄腫，．．の療法が掲載されているので表題の癌は悪性腫瘍の総称である．

癌の画像診断[39]

肺癌・胃癌・．．等の他に，第８章 悪性リンパ腫の画像診断が掲載されているので表題の癌は悪性腫瘍の総称である．

なるほどなっとく！　病理学[40]

「癌とは，腫瘍のなかでも宿主の生命を奪うまでに至る悪性のもの（悪性腫瘍）を指す．」と記載されている．

シンプル病理学[41]

「悪性腫瘍は一般に癌cancer（がんと平仮名で書くこともある）と呼ばれるが，」と記載されている．

肺癌薬物療法レジメン[42]

「薬物療法の対象に，胸腺腫，悪性胸膜中皮腫をも含めているので表題の肺癌は悪性腫瘍の総称である．がん研の先生の編著であるが「肺癌」である．

標準病理学　第１～５版[43~47]

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ「①癌，

「がん」*cancer*，Krebs は広く悪性腫瘍全体を指すことと，狭義に癌腫 *carcinoma* を指すことがある。胃癌，子宮頸癌などというときはその部の癌腫を指す。
文献20）より引用

図２

『ガン』は悪性腫瘍を総称する」が掲載されている．本文では漢字「癌」が使用されている．

最後に，病理学[20]において，本文の最後に一行空白を置き，小さめの字で図２の文言が追加記載されている．

文頭の「がん」が漢字でなければ文脈が成り立たない．文献35）と同様に癌には広義（総称）と狭義（癌腫）の意味がある事を述べているのではないかと思われる．他の二冊の文献[4,12]にも同一の文言が認められる．別々の文献でありながら不思議な一致であるが，同一の著者が関与している為かもしれない．一見すると，「がんは悪性腫瘍全体を指す」と書いてあるかの様であるが，何れの文献も本文は「癌」を用いて書かれており，がんは癌の書誤りと思われる．

B 群．悪性腫瘍の総称にも癌腫の診断名にも総て「がん」が用いられている文献[48－71]

1990年代以降，特に2000年代以降に多く認められたが，平仮名がんを用いた病理学の成書は非常に少ない[48,61,63,65]．癌治療に関するハンドブックの類いは，小冊子が多く，時代遅れの特に小型の化学療法の成書等は次々と廃棄され残されていない可能性が推測される．

看護学生のための病理学[48]

がんは，がんしゅと肉腫に分類されると記載されているが，がん（癌）の記述も認められ漢字「癌」を意識している．編者の御一人坂本穆彦先生は，漢字癌を使用している標準病理学 第１～第５版[43－47]の出版にも関与されている．

はじめの一歩の病理学[61]

「悪性腫瘍は広い意味でがん（癌）と呼ばれる」と記載され，胃がん・大腸がん・肺がん・．．が認められる．ここでもがん（癌）の表記が認められる．

ハマー＆マクフィー疾患の病態生理[63]

がんは，がん腫と肉腫に分類されると記載されている．

がん化学療法レジメン管理マニュアル[66]

乳がん・肺がん・胃がん・．．等の他に，婦人科がん・造血器腫瘍（非ホジキン腫瘍　ホジキン腫瘍　慢性骨髄性白血病　多発性骨髄腫）等が掲載されているので，表題のがんは悪性腫瘍の総称と考えられる．

がん化学療法副作用対策ハンドブック[69]

乳がん・肺がん・胃がん・．．等の他に ７泌尿生殖器腫瘍（腎・膀胱・前立腺）・胚細胞腫瘍 ８骨軟部組織腫瘍 10造血器腫瘍 等が掲載されているので，表題のがんは悪性腫瘍の総称と考えられる．

C 群．悪性腫瘍の総称には「がん」を、癌腫の診断名には「癌」が用いられている文献[72－80]

本稿の主題となる文献なので，口腔癌診療ガイドライン[78]と口腔外科学の成書[79,80]を除いて，総て書面により執筆者に真意を確認した．

がん・放射線療法 2017[72]

問合せに対して御回答は頂けなかった．

解明　病理学［第３版］[73]

「悪性腫瘍を，一般にがん（cancer）と呼ぶ．がんは，上皮組織に由来するものが多く，これを癌腫または癌（carcinoma）と呼ぶ.」と記載されている．

筆者の用語の質問に対する御回答は「がんを悪性腫瘍全般を指す用語として使う事は一般的で，対応する用語はcancerである．悪性上皮性腫瘍＝癌＝癌腫＝carcinomaであり，現在は、がん＝癌とするのは問題が大きいと考えています。」であった．日本癌学会や日本癌治療学会の言うがん＝癌＝cancerと真っ向から対立する独特の考えである．

クイックマスター病理学[74]

コラム「癌」と「がん」の違いとは？　において「漢字の癌は上皮性悪性腫瘍（正確には癌腫）をさし，平仮名のがんは（中略）全悪性腫瘍をさしています。」と明記し，「『○○がんセンター』と表記した場合，すべての悪性腫瘍を扱うセンターという意味になります。」と説明してる．ところが，問合せに対する御回答では，想定される読み手に応じて適宜癌とがんとを自由に用いて良いのではないかとの御意見であったが，その後の御回答で，「癌＝がんとした時に困るのは、非上皮性悪性腫瘍の場合です。」とし，更に「癌」が用いられない白血病や悪性脳腫瘍を引き合いに「厳密な意味で、がん＝癌ではありません。」と述べられているので，真意は必ずしも明らかでない．

ロビンス基礎病理学　原書第10版[75]

「悪性腫瘍は、ラテン語の“カニ”に由来する“がん”（cancer）と総称されている。」と定義され，がん腫と肉腫に分類されている．しかし，癌腫、扁平上皮癌，腺癌の記載も認められる．

問合せに対する御回答は「癌＝がん＝cancerと考えるので悪性腫瘍の総称を平仮名『がん』で統一しました。一方、上皮系悪性腫瘍は、読みやすさも考慮して『癌』で統一しました。しかし、『がん』でも問題はないと考えます。『がん腫』の表記は、表記の統一性を考えると『癌腫』とすべきでした。意図的に『がん腫』と平仮名を使用しているわけではありません。」との事であった．

標準病理学　第６版[76]

「悪性化した腫瘍を悪性新生物malignant neoplasia，あるいはがんcancerと呼ぶ」と定義し，癌腫の診断名には癌を用いている．

編者北川昌伸、仁木利郎両先生と相談の上，医学書院

編集部を経由して，先の筆者の質問に対して令和三年一月に，「用語の使い方については、複雑な歴史があることかと思いますが、『標準病理学』編集部としては、昨今の医療現場の流れを汲んで用語を使用しております。」との御回答を頂いた．

標準病理学 第１～第５版[43-47]は悪性腫瘍の総称にも癌腫の診断名にも漢字の「癌」を使用して来た．第５版では北川昌伸，仁木利郎両先生が編者であった．第６版で大きく編集方針を変更した事になる．「癌」を平仮名の「がん」と表記する流れはあるかもしれないが，医療現場の流れは別に「悪性腫瘍の総称をがんと表記し、癌腫の診断名を癌で表記する」様にはなっていないと思われる．

がん診療スタンダードマニュアル[77]

本書の表題名には「がん」が用いられ，診断名は肝癌・胃癌・乳癌・泌尿器がん（膀胱癌・前立腺癌・腎癌）・..の様に「癌」が用いられているが，著者の勝俣範之先生から，「がん」と「癌」とを交えて記載しておりますが「がん」と「癌」とは同様であると考えておりますとの御回答を頂いた．

口腔癌診療ガイドライン 2019年版[78]

第二章　疫学に「口腔がんは顎口腔領域に発生する悪性腫瘍の総称である．病理組織学的に口腔がんの90％以上は扁平上皮癌であり，（中略）最も頻度が高い扁平上皮癌を『口腔癌』として述べる」と書かれている．要するに，日本口腔腫瘍学会と日本口腔外科学会は「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫」と定義している事が知られる．

口腔外科学　第４版[79]，標準口腔外科学　第４版[80]

両者とも口腔外科医による執筆で，口腔癌診療ガイドライン[78]の定義を忠実に記載している．

D群．その他のA～Cのいずれにも属さない文献[81, 82]

スタンダード病理学　第４版第１刷[81]

「がん」と「癌」とが統一無く使用されているので問合せたところ，編集部から手違いが有り訂正して第２刷の出版を予定しておりますと回答してゲラ刷をお送り頂いた．しかし，がん細胞・癌細胞，がん抑制遺伝子・癌抑制遺伝子，発がん・発癌等の混在が認められ，山極勝三郎の山極が「山際」となっていたりしてまだ充分に改訂されていなかった．文献引用すべきでないと考えたが，困った事に現在店頭に並んでいる成書であり，引用しなければ筆者が見逃したのかと疑われかねない．苦渋の決断で最終的にこの群に分類することにした．編集部には誤りの箇所を指摘しておいた．尚，第２版[26]は総て「癌」を使用していた（A群）．

新口腔病理学[82]

最新の口腔病理学の成書なので，あえて引用した．しかし，口腔癌は上皮性の悪性腫瘍を意味し，悪性腫瘍の総称には何ら言及していない．口腔癌の発生率に関し（173頁），「わが国の口腔癌の発生率は全癌腫の２～４％とされる」と記載されている．

Ⅳ．考　　察

過去四十年間の病理学・悪性腫瘍関連の学術書において「がん」と「癌」とがどの様に用いられているかを文献を収集して検索した．悪性腫瘍の総称並びに癌腫に「癌」を用いているものが圧倒的に多く[4-47]，次いで「がん」であった[48-71]．仮名の「がん」を用いている病理学の成書は極く少数であった[48, 61, 63, 65]．「悪性腫瘍の総称にがん，癌腫に癌」は僅少であった[72-80]．

口腔病理学関連の成書三冊を見出した[29, 32, 82]が，二冊[29, 32]は悪性腫瘍の総称にも癌腫にも「癌」が用いられている文献（A群）で，残り一冊[82]では悪性腫瘍の総称への言及は無く，癌腫に癌が用いられていた．

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せを掲載している文献[5, 7, 10, 13, 19, 43-47]を見出した．

A群における悪性腫瘍の総称の定義を俯瞰してみると；

「通常“癌”あるいは“がん”cancerという言葉は癌腫だけでなく肉腫を含み，悪性新生物malignant neoplasmsを総称している[6]．」「『がん』（cancer）は悪性腫瘍全体を指す言葉である[11]。」「１）癌（がん）は一般に悪性腫瘍を代表する（癌腫，肉腫を含めて）[13]。」「悪性腫瘍malignant tumorはまた癌（がん）cancer，Krebsともいい[20]，」「悪性腫瘍malignant tumorすなわち癌は[27, 34]」「『癌cancer』という言葉は普通，悪性腫瘍全体を指すが[31]，」「悪性腫瘍は一般に癌（がんと平仮名で書くこともある）と呼ばれるが[41]，」等種々であった．癌 がんcancerを用いずに，悪性腫瘍は癌腫と肉腫とに分けられるとの定義も見られた[8, 9, 12, 20, 23]が，本文中で悪性腫瘍の総称に「癌」の使用が確認出来たものはA群に分類した．

“癌（がん）”は，本来悪性腫瘍中の癌腫のことであり，肉腫を含まないものであるが，人類では癌腫の発生が圧倒的に多く，肉腫は少ないので，現在では悪性腫瘍を総称して癌といい，その区別を要するときに癌腫，肉腫として区別する[5, 7, 22, 24, 75]．

癌の定義が，癌腫の意味から現在の悪性腫瘍の総称に移行する過程では，当然用語の定義に混乱のあったことは容易に想像できる．事実，癌腫にcancer，Krebsを対応させている文献[5, 10]，悪性腫瘍を癌と肉腫に分類している文献[16, 18]も認められた．また，悪性腫瘍の用語の中には漫然と習慣的に用いられて来たものもあった．その用語の混乱を整理する為に，間接資料ながら，昭和三十四年（1959年）六月二十七日に日本癌学会幹事会において悪性腫瘍の用語使用基準申合せが行われている[5]（図１下）．この時の申合せで，悪性腫瘍の総称は漢字の癌の他に仮名も容認されたと思われるが，癌（がん）としている文献[7, 10, 13, 19]と癌（ガン）としている文献[5, 43-47]とが有り，文言も各

2．がん，癌，癌腫，cancer，carcinoma

がん，癌，癌腫，cancer，cancinoma の用語を用いる際は，以下のことに留意して使用することが望ましい．

がん，癌，cancer は同義で，上皮性，非上皮性を問わずすべての悪性腫瘍を意味する。癌腫と carcinoma とは同義で上皮性の悪性腫瘍の意味である。肉腫に対応する言葉として，癌腫という用語が用いられる。ただし臓器名，組織名の語尾に癌という用語がついている場合(例えば胃癌，腺癌など)には，癌腫を表す．また上記の意見に対し，平仮名のがんは白血病なども含めてすべての悪性腫瘍を意味し，漢字の癌は上皮性悪性腫瘍を意味するものとして，両者を区別して書く考えがあるが，音声上両者を区別し難い難点がある．

図 3
日本癌治療学会は，
がん，癌，cancer は同義としている．
文献２）より引用

文献で少しずつ異なっていた．直接資料を見出し得ていないので，癌（がん，またはガン）と決められたのか，癌（がん）と決められたのか，それとも癌（ガン）と決められたのか否かは不明である．（恐らく議事録［幹事会報告事項］が残されているのではないかと考えられるが，コロナ禍の為に，自由に立入って日本癌学会発行の学会誌を書架から取り出して議事録を検索する事は許可して頂けなかった．）しかし，多くの文献から漢字「癌」の他に仮名書き「がん，またはガン？」も容認されたと考えて誤りは無いと思われる．そうならば「総称に癌、癌腫の診断名に○○癌」の組合せと「総称にがん，癌腫の診断名に○○癌」の組合せとの何れの組合せがあってもおかしくないと考えられるが，実態は「癌＋癌」の組合せ（A群）は多く有るが，「がん＋癌」の組合せ（C群）は僅少であった．「癌＋癌」の組合せに次いで多かったのは「がん＋がん」の組合せ（B群）であった．片仮名の「ガン」を使用している文献は今回の検索では皆無であった．

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せ[5]では「癌」の他に「がん」も容認されたと言う事であり，悪性腫瘍の総称は漢字の「癌」でなく平仮名の「がん」と表記すべきであるという事とは全く異なる．従って，偶々悪性腫瘍の総称に「がん」を選ぶ事も有る[11,32,75,77]ので，悪性腫瘍の総称に「がん」が用いられ癌腫の診断名には「癌」が用いられている学術書や学術論文が有ったとしても，「がんは悪性腫瘍の総称を，癌は癌腫を意味する」と主張する一部の先生の考えを常に支持する証拠にはなり得ない．

この理由から筆者は本稿を作成するに当たり，口腔癌診療ガイドライン[78]と口腔外科学の成書[79,80]を除いて，悪性腫瘍の総称に「がん」が使用され癌腫の診断名に「癌」が使用されているC群の文献[72-77]の著者の総てに書面で真意を問い合わせた．その結果，癌＝がんなので総称に「がん」を使用したに過ぎず，「悪性腫瘍の総称はがんと表記すべきである」との信念で仮名の「がん」を使用した訳ではないと回答を頂いた文献が二冊有った[75,77]．「がんは悪性腫瘍の総称を，癌は癌腫を意味する」の主張に従って記載している文献は六冊であった[73,74,76,78-80]が，口腔外科関連の文献[78-80]を除けば僅か三冊であった[73,74,76]．しかも，その内の一冊[73]は，がん＝癌ではなく，悪性腫瘍全般はがん＝cancerであり，悪性上皮性腫瘍＝癌＝癌種＝carcinomaであると言う異色の考えに基づくものである．色々な考えがあるものである．回答が頂けず真意が不明であった文献は一冊であった[72]．

ところで，日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せで悪性腫瘍は癌＝がんとしているのにも拘わらず，「悪性腫瘍の総称としての癌（広義の癌）と癌腫の診断名としての癌（狭義の癌）の組合せ」において，C群の「がん＋癌」の組合せよりもB群の「がん＋がん」の組合せの方が何故多いのであろうか．癌腫の診断名を平仮名「がん」で表記する所以（ゆえん）は何なのであろうか．

これこそが当用漢字施策により，当用漢字に含まれない「癌」は使用出来ない為に「癌」は「がん」と仮名表記する事を与儀なくされた結果の産物である．悪性腫瘍の総称を意味する癌であれ，癌腫を意味する癌であれ，すなわち広義の癌であれ，狭義の癌であれ，何れも「がん」と表記せねばならず，行政・報道（新聞・テレビ）等は忠実に実行した．法律・行政文書・新聞記事等では，常に「がん」と記載されている事から容易に理解出来る[1]．

当用漢字施策下でも医学では「癌」を使用し続けたが，医学以外では「がん」を使用したので，截然として二本立ての状態がしばらく続いたが，次第次第に医学で「がん」も使用される様になった．その際，当然「がん＋がん」の組合せで医学に入り込んで来た．悪性腫瘍の総称を意味する「がん」だけが入り込んで来たのではない[1]．がんセンターは癌腫にもがんを用いるのである．これが「がん＋がん」の組合せの多い理由である．

当用漢字施策下における「がん」の表記に関しては既に縷々論じた[1]ので，これ以上繰返さない．

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せの様に癌＝がんなので，特別の深い意図無しに偶々「がん＋癌」の組合せで表記する事があっても何ら不思議は無い筈である[11,32,75,77]．ところが，日本口腔腫瘍学会と日本口腔外科学会は，口腔癌診療ガイドライン[78]において，平仮名の「がん」は悪性腫瘍の総称（口腔がん）であり，漢字

の「癌」は癌腫の診断名に用いて癌腫（口腔癌）を意味するとして，がんと癌とを使い分けている．口腔癌診療ガイドライン[78]の様に「がんは悪性腫瘍の総称を，癌は癌腫を意味する」とがんじがらめの定義を決め，これに従わなければ間違いであると考える事は，全国のがんセンターが「がん」を使用してるから悪性腫瘍の総称は「がん」と表記すべきであると言う単純な着想に基づいている[1]だけに，大いに問題がある．しかも本ガイドラインの作成に尽力された日本口腔腫瘍学会の編集委員であった元教授が，近年では「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫」と使い分けられている事が多く，「医学の慣用となっているのは間違いありません。」「医学的にも一般社会的にもこの様な使い分けをしている」と断言している[1]．しかし，「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫の意味」の定義に合致する文献は極めて僅かであり，医学の慣用には全然なっていないし，医学的にも一般社会的にもこの様な使われ方はほとんどなされていない．限られた狭い特定の学会内だけでしか通用しない定義である．

日本癌学会の悪性腫瘍の用語使用基準申合せは，その後改訂はなされていない様である[1]．

日本癌治療学会　用語・ICD-11委員会は，「癌に関する用語の共通する理解による正確な記述と意思の伝達を目的として」，1987年に最初の用語集を発表した[2]．「がん・癌」に関しては図３の通り「がん，癌，cancerは同義で，上皮性，非上皮性を問わずすべての悪性腫瘍を意味する。」としているが，その後1991年，2004年，2007年、2010年に改訂版を出版し，更にその後新たに用語を追加して改訂し2013年版[3]としてホームページに掲載した．少なくとも言える事は，「全項目に渡って各委員の統一見解が得られた訳ではなく，（中略）完全なものではな」いが，1987年の最初の用語集[2]発表時から，「平仮名のがんは悪性腫瘍の総称を意味し，漢字の癌は癌腫を意味する」と言う考え，すなわち「悪性腫瘍の総称と癌腫とを平仮名と漢字で書き分ける事」に対しては一貫して否定的見解を明らかにして来た[3]．更に，用語　癌幹細胞（cancer stem cells）の説明文中では「がん細胞」「がん幹細胞」が，用語　癌検診（screening for cancer）の説明文中では「がんの死亡率」「胃がん，肺がん，. . .」が使用されている[3]．明記されてはいないが，悪性腫瘍の総称のみならず，癌腫の癌も「癌」「がん」の何れを用いても構わない事を示唆していると思われる．

自らの学会名には，日本癌学会・日本癌治療学会の様に「癌」を用い，学術論文等にも通常「癌」を用いているが，適宜平仮名の「がん」を用いる事は排除していない．事実，「癌」を一切用いずに，悪性腫瘍の総称にも癌腫の診断名にも総て「がん」を用いる学術書・学術論文・一般向けの書物も非常に多く認められる．むしろ両学会とも「癌」と「がん」とを臨機応変に使い分けている．日本語に漢字と仮名で意味が異なるものは一つとして無い．漢字と仮名で意味の違いを区別する発想そのものが間違いである．漢字・仮名の使用は，融通無碍と言わないまでも，無秩序・無統制でない限り，もっと自由闊達なものではないであろうか．

日本膵臓学会と日本肺癌学会とはそれぞれ膵癌診療ガイドライン[83]，肺癌診療ガイドライン[84]を出版しているが，これとは別に患者・市民向けにそれぞれ膵がん診療ガイドライン[85]，肺がん診療ガイドブック[86]を出版している．医師向けと思われるガイドラインでは「癌」を使用しても，市民向けには「がん」を使用し，更に，少し難しいと思われる漢字には懇切丁寧にルビを振っている[85, 86]．漢字と仮名の使用は臨機応変で良いのではないであろうか．

日本癌学会・日本癌治療学会・日本乳癌学会・日本肺癌学会・. . 等は何れも総ての悪性腫瘍を研究対象としている．学術誌「癌の臨床」「癌と化学療法」は総ての悪性腫瘍を網羅している．それにも拘わらず，もし仮に「がんは悪性腫瘍の総称，癌は癌腫を意味する」が正しい定義だとすれば，何十年も前から存在する日本癌学会・日本癌治療学会・. . 等は癌腫を研究対象とする学会と言う事になり，「癌の臨床」「癌と化学療法」は癌腫を研究対象とする学術誌と言う事になり，更に，総ての悪性腫瘍を対象とする日本癌学会・日本癌治療学会・. . 等は日本がん学会・日本がん治療学会・. . 等と仮名書きに変更し，「癌の臨床」「癌と化学療法」は「がんの臨床」「がんと化学療法」と仮名書きに変更せねばならなくなる．いくら何でもこんな馬鹿げた話は成り立ち得ない．これ等の例からだけでも「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫」は医学の常識から著しく逸脱している事が容易に理解出来る．この定義は不適切なのである．

「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫」と定義する事によって医学の上に幾ばくかの利点があるならば，広く斯界の賛同が得られる筈である．しかし，何十年も前から繰り返し主張されて来たこの定義は，現在に至るまで広く賛同を得るには至っていない．日本癌治療学会は，閉鎖的で偏向した学会ではなく，医学の多数の分野が参加する自他共に認める領域横断的学会である．事実，日本病理学会と共に，二十二の学会の癌取扱い規約より抜粋した領域横断的がん取扱い規約[87]を発行している．「がんは悪性腫瘍の総称を意味し、癌は癌腫を意味する」とする定義には，その日本癌治療学会が何十年も前から用語統一の重要性の見地から繰返し否定的見解を述べて来た．学術の世界において一つの用語が多義的であってはならない．学問を論ずるには用語の定義は同一でなければならない．共通の言語である事によって，意見交換の内容の質が担保される．しかし，口腔癌診療ガイドライン[78]の定義はこれに真っ向から対立する．

歯科大学（歯学部）における病理学は口腔病理学と呼ばれており，医学部で教えられる病理学の他に口腔病理学が教えられる．口腔病理学の学会は，日本臨床口腔病理学会の名称になっている．

日本臨床口腔病理学会が，がんと癌とを使い分けているのかどうか，教育はどう行われているかを問合せてみたところ，丁寧な御回答を頂いた．

結論的には，「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫を意味する」と定義して学生教育を行っているとの事であった．「これについては病理学の教科書に記載されている通りです．」と述べられているのであるが，医学分野の病理学の教科書にこの様な記載があるのは僅少である．更に，「厚生労働省が指定する都道府県がん診療連携拠点病院、地域がん診療連携拠点病院、特定領域がん診療連携拠点病院および地域がん診療病院は『がん』となってい」る事を「がんは悪性腫瘍の総称」の論拠に挙げておられるが，行政は，当用漢字施策下では「癌」の代わりに「がん」を用いただけの事であり，クイックマスター病理学[74]・口腔癌診療ガイドライン[78] 共々これは完全な間違いである[1]．

学会としての取決めは無く，経緯は不明であるが，日本臨床口腔病理学会も口腔癌診療ガイドライン[78] の定義を共有していると思われた．

その後の日本臨床口腔病理学会理事長との意見交換で，概ね筆者の主張に御理解を示して頂き，更に筆者の依頼に応じて本稿作成に必要な多数の資料・文献を送って戴き，御指導をも賜った．

口腔癌診療ガイドライン[78] の定義通りにがんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫を意味するとする口腔外科学の成書二冊[79, 80] を見出した．口腔癌診療ガイドラインは，2009年１月に初版が出版され，2013年５月，次いで2019年10月に改訂され，初版以来既に十年以上が経過し，この間に確実に口腔外科医の間にこの定義が浸透し，口腔外科学の成書にも反映されている．しかし，がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫の定義に合致する文献は医学（狭義）分野の文献でも見出した[73, 74, 76] が，極めて僅かであり，しかも個人レベルの考えであり，学会レベルの定義ではない．従って，医学の慣用には全然なっていないし，医学的にも一般社会的にもこの様な使われ方はほとんどなされていない事を文献的に確認出来た．この定義は，広く医学全体を見渡した場合，医学（広義）の中の小集団である口腔外科界だけにしか通用しない特殊な定義と思われる．医学の中では市民権を獲得していない．

ところで，日本婦人科腫瘍学会編：卵巣がん・卵管癌・腹膜癌治療ガイドライン[88] に，多くは「癌」が使用されているのに拘わらず，「卵巣がん」と記載されているのが奇異な印象を与える．しかし，「『卵巣癌』という用語は，狭義的に卵巣原発の表層上皮性・間質性の悪性腫瘍を意味し，英語ではepithelial ovarian cancerと表記される事が多い。」と記載されているので，間質性悪性腫瘍を含めて卵巣癌と表記される事が多いと認識しながらも，本ガイドラインには，他の悪性卵巣腫瘍である胚細胞腫瘍・性索間質性腫瘍が含まれている事から，これら全てを包含して「卵巣がん」の用語を用いる事を用意周到・懇切丁寧に説明している．この「がん」は悪性腫瘍の総称とは関係が無い．何故卵巣がんなのかがよく分かる．

ところが，口腔癌診療ガイドライン[78] には何故悪性腫瘍の総称はがんと記載するのかの説明は全く無い．それにも拘わらず，日本口腔腫瘍学会や日本口腔外科学会あるいは日本臨床口腔病理学会の会員が，がんと癌とで意味が異なるとする定義を何の疑念も抱く事無しに全面的に受け入れているのだとすれば，誠に憂えるべき事態である．ガイドラインに根拠を明記すべきである．

筆者の論述は，「がん＋癌」の組合せ（C群）が正しいとお考えの方々にとっては断然承服仕兼ねる事かもしれない．

確かに，もっと広く文献を渉猟すれば「がん＋癌」の組合せの文献は見つかるであろう．しかし，その数は決して多くなく，特に医学（狭義）分野の文献を新たに見出す事は殆ど不可能であると確信している．

しかしながら，「がん＋癌」が医学の慣用となっているのは間違いなく，医学的にも一般社会的にもこの様な使い方がなされていると述べておられる元教授[1] には，多分心当たりが有り，歯科医学分野の文献を多数提示出来るのかもしれない．しかし，多数提示すればするほど医学と歯科医学とで悪性腫瘍の用語の定義の異なる事が一層明らかとなり，医学対歯科医学の対立の構造が明瞭に浮かび上がって来る危険性を孕んでいる事を予め警告しておきたい．

最後に，本稿に対して学兄各位の忌憚のない御批判を戴ければ幸甚である．

Ⅴ．結　　論

平仮名の「がん」は悪性腫瘍の総称を意味し漢字の「癌」は癌腫を意味するという主張があるので，過去四十年間に出版された病理学・悪性腫瘍関連の学術書において，「がん」と「癌」とがどの様に用いられているのかを文献的に検討した．

悪性腫瘍の総称にも癌腫にも「癌」を使用している文献が最も多く，次いで「がん」を使用している文献が多く，悪性腫瘍の総称に「がん」を使用し癌腫に「癌」を使用している文献は僅少であった．

歯科医学会の日本口腔腫瘍学会・日本口腔外科学会が確たる根拠を示す事無しに学会として「がんは悪性腫瘍の総称を、癌は癌腫を意味する」と定義して口腔癌診療

ガイドライン[78]にも明記している．その結果口腔外科界では「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫」が広く正しい定義と認識され，口腔外科学の成書[79,80]にも反映されている．がんは悪性腫瘍の総称を意味し、癌は癌腫を意味すると定義している口腔病理学の成書は見出せなかったが，日本臨床口腔病理学会もこの定義を共有して来た事が知られた．

歯科大学（歯学部）における教育では基礎（口腔病理学）並びに臨床（口腔外科学）共に「がんは悪性腫瘍の総称を、癌は癌腫を意味する」の定義が周知徹底されていると思われる．その結果医学の中の小集団である歯科医学が独自の定義で悪性腫瘍を論じている．

「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫を意味し」「がんと癌とでは意味が異なる」とする主張が極く一部の医学（狭義）分野の文献[73,74,76]にも記されている．しかし，何れも学会の定義ではない．この定義に対しては，日本癌治療学会は医学用語統一の重要性の見地から長年に渡って否定的見解を述べている．

口腔癌診療ガイドライン[78]はがんと癌とでは意味が異なるとして使い分けているが，その根拠は全く記載されていない．根拠を明記すべきである．

上述の通り，歯科医学界あるいは口腔外科界では「がんは悪性腫瘍の総称、癌は癌腫」の定義が，広く周知徹底されていると思われるが，この定義は特異であり，異端である．

Ⅵ．結　　語

「がんは悪性腫瘍の総称を、癌は癌腫を意味する」とする主張があるので過去四十年間に出版された学術書において，「がん」と「癌」とがどの様に用いられているかを検討した．

「がんは悪性腫瘍の総称を、癌は癌腫を意味する」と定義する学術書は僅少であり，この定義は医学において市民権を得ているとは言えない．

謝　　辞

多数の資料・文献を御送り戴き，御指導を賜りました日本臨床口腔病理学会理事長　前田初彦教授に深く感謝の意を表します．

多数の文献の中から，文献10）と32）とを使わせて戴いた．

文　　献

1）藤田浄秀：がんと癌とで意味が異なるか　―医学用語の混乱を憂える―．横浜医学，**72**：47－57, 2021.

2）日本癌治療学会　癌の治療に関する合同委員会　癌規約総論委員会「用語委員会」編：癌の臨床に関する用語（案）．日癌治，**22**：2502－2512, 1987.

3）日本癌治療学会：ホームページ　用語集の改訂について．一般社団法人日本癌治療学会　用語・ICD-11委員会　用語集（2013年版），がん，癌，癌腫（cancer）/癌幹細胞（cancer stem cells），癌検診（screening for cancer）．

4）今井　環　監修，田中健蔵，遠城寺宗知　編集：病理学，第４版第１刷，第15章　腫瘍総論／第16章　腫瘍の分類，253－282頁／283－329頁．医学書院，1984年５月．

5）赤崎兼義　編：病理学総論，第12版４刷．F.　腫瘍［腫瘍総論］7.　腫瘍の分類／［腫瘍の各論］［A］上皮性腫瘍［b］悪性上皮性腫瘍　癌腫 cancer, Krebs;carcinoma, Karzinom.　1.　癌腫の定義　2.　癌腫の名称，395－398頁／403頁．南山堂，1985年１月．

6）吉村　和〈顧問〉　飯島宗一，石川栄世，影山佳三，島峰徹郎，森　亘〈責任編集〉：現代病理学大系　第９巻Ａ　腫瘍の概念　2.　腫瘍の病理学的分類　1.　形態的特性による癌の分類，21－23頁．中山書店，1985年12月．

7）武田勝男　編：新病理学総論，第13版７刷，第12章　腫瘍　Ⅱ．腫瘍の一般的性状による分類と命名，402－403頁．南山堂，1986年２月．

8）田中　昇，坂本吾偉，丸山孝士：第５章　腫瘍．竹内　正　編：病理学総論，第２版，141－186頁．日本医事新報社，1987年10月．

9）小泉富美朝：第６章　腫瘍．青木重久，小泉富美朝編著：基準病理学総論，第１版第１刷，189－235頁．南江堂，1988年１月．

10）片桐正隆　著：要説病理学，第１版第１刷，第９章　腫瘍（新生物）tumor（neoplasm），114－140頁．書林，昭和63年３月．

11）堀江昭夫：15 腫瘍［15.1腫瘍総論］．田中健蔵監修，住吉昭信　編集，居石克夫，住吉昭信，田中健蔵，堀江昭夫，森松　稔，渡辺照男　共著：新版病理学入門，初版第１刷，124－152頁．朝倉書店，1988年10月．

12）遠城寺宗知：第15章　腫瘍総論 Ⅷ．腫瘍の原因／第16章　腫瘍の分類．田中健蔵　監修，遠城寺宗　編集：病理学，改訂第５版第１刷，287－298頁／299－343頁．医学書院，1989年４月．

13）影山圭三　編集：病理学，第４版第１刷，7.　腫瘍 C 腫瘍の分類，56頁．医学書院，1989年７月．

14）Zollinger著，山口和克　訳：Zollinger病理学，第１版第２刷，７章　腫瘍学 腫瘍総論，150－170頁．文

光堂，1989年12月．
15）横路謙次郎，伊東信行，橋本嘉幸，石館　基　編著：発癌　理論と実際，初版．学会出版センター，1992年８月．
16）西山保一　著：新版 要説病理学，改訂第一版第二刷，８ 腫瘍（tumor） 2．腫瘍の良性と悪性，205－207頁．学文社，1992年10月．
17）中西和夫：⑦ 腫瘍　29．腫瘍の分類と命名法．藤田哲也　編著，中西和夫，伏木信次　共著：病理学入門書，第１版２刷，93－96頁．金芳堂，1993年５月．
18）東洋療法学校協会　編，畠山　茂　著：病理学概論，第１版５刷，第８章　腫瘍，73－95頁．医歯薬出版，1994年１月．
19）福西　亮，植田規史，森　浩志：Ⅸ．腫瘍総論，B．腫瘍の分類と命名法，3．悪性腫瘍の命名法．横山武，福西　亮，綿貫　勤，喜納　勇　編集：現代の病理学　総論，改訂第２版増補第５刷，351－352頁．金原出版，平成６年２月．
20）恒吉正澄：⑮腫瘍総論／⑯腫瘍の分類．遠城寺宗知監修，居石克夫，恒吉正澄　編集：病理学，第６版第１刷，285－315頁／316－337頁．医学書院，1995年４月．
21）佐藤昇志，菊地浩吉　編著：分子腫瘍学，初版１刷．中外医学社，1996年７月．
22）望月洋一：14　腫瘍　Ⅱ．腫瘍の一般的性状による分類と命名．菊地浩吉，吉木　敬　著：新病理学総論，第15版４刷，462頁．南山堂，1997年１月．
23）斉藤　澄，中村恭一：7．腫瘍　1．腫瘍の概念．中村恭一，若狭治毅，桜井勇　編集：医系病理学，初版１刷，423－464頁．中外医学社，1997年５月．
24）アンダーウッド編，鈴木利光，森　道夫　監訳，榎木克彦，菅原　勇　協力：カラー版 アンダーウッド病理学．第11章　発癌と新生物，207－246頁．西村書店，2002年２月．
25）岸本　充　訳：第６章　腫瘍．Stevens，Lowe著，石倉　浩　監訳：人体病理学　原書第２版，79－104頁．南江堂，2002年12月．
26）松浦成昭，大西俊造：総論　Ⅻ．腫瘍　A．腫瘍の概念．大西俊造，梶原博毅，神山隆一　編：スタンダード病理学，第２版第１刷，143－167頁．文光堂，2004年３月．
27）河原　栄　訳：第５章　腫瘍　良性と悪性腫瘍．ルービン　編者，河原　栄，横井豊治　監訳：ルービン　カラー基本病理学，初版第１刷，76頁．西村書店，2004年４月．
28）小川一誠　編集：抗癌剤の選び方と使い方，改訂第３版，南光堂，2004年10月．
29）竹内　宏：Chapter 8 腫瘍　4腫瘍の形質　2）腫瘍の組織構造．竹内　宏，草間　薫　編：最新病理学・口腔病理学，175－177頁．医歯薬出版，2007年３月
30）杉野　隆　訳：第５章　腫瘍．ルービン著，鈴木利光、中山栄男，深山正久，山川光徳，吉野　正　監訳：ルービン　カラー病理学―臨床医学への基盤―，初版第１刷，147－191頁．西村書店，2007年11月．
31）深山正久　編：腫瘍病理学，第１版第２刷．文光堂，2008年６月．
32）二階宏昌：９章　腫瘍．二階宏昌，佐藤方信，賀来亨　編：歯学生のための病理学― 一般病理編，第２版第６刷，154－184頁．医歯薬出版，2009年１月．
33）スキール編，古江　尚，塚越　茂，佐々木常雄，浦部晶夫，中根　実　訳：癌化学療法ハンドブック，第６版１刷．メディカル・サイエンス・インターナショナル，2009年４月．
34）河原　栄　訳：第５章　新生物（腫瘍）．ルービン，ライスナー編集，河原　栄，中谷行雄　監訳：ルービン　カラー基本病理学 原書第５版，初版第１刷，85－111頁．西村書店，2015年３月．
35）小田義直：7 腫瘍　1種類と名称．岩田隆子　監修，恒吉正澄，小田義直　編集：分かりやすい病理学，改訂第６版，80頁．南江堂，2016年３月．
36）杉野　隆　訳：第５章　腫瘍　腫瘍の病理学．ルービン，ストレイヤー著，鈴木利光，中村英雄，深山正久，山川光徳，吉野　正　監訳：ルービン　カラー病理学　臨床医学への基盤 改訂版，初版第１刷，161－171頁．西村書店，2017年11月．
37）高橋　玲　編著，北沢荘平　著：Dr. レイの病理学講義，第３版第１刷，第６回　腫瘍（新生物），55－68頁．金芳堂，2018年１月．
38）大津　敦　総監修：エビデンスに基づいた癌化学療法ハンドブック 2018，メディカルレビュー社，2018年６月．
39）堀田昌利　著：癌の画像診断　重要所見を見逃さない．羊土社，2018年10月．
40）小林正伸　著：なるほどなっとく！ 病理学　病態形成の基本的な仕組み，改訂２版１刷，第10章 腫瘍 B腫瘍の分類，172－175頁．南山堂，2019年２月．
41）岡田保典：第９章　腫瘍　9－1．腫瘍の概念と命名法．笹野公伸，岡田保典，安井　弥　編集：シンプル病理学，改訂第８版，103－104頁．南江堂，2020年７月．
42）がん研有明病院呼吸器内科　柳谷典子，長谷川　司，網野喜彬，植松慎矢　編著：肺癌薬物療法レジメン，１版１刷．中外医学社，2020年７月．
43）坂本穆彦：８ 腫瘍　1．定義と分類．町並陸生，秦

順一　編集，坂本穆彦　編集協力：標準病理学，第１版第３刷．217－225頁．医学書院　1999年３月．
44）坂本穆彦：９ 腫瘍　1．定義と分類．町並陸生　監修，秦　順一，坂本穆彦　編集：標準病理学　第２版第２刷，221－229頁．医学書院，2003年４月．
45）坂本穆彦：９ 腫瘍　1．定義と分類．秦　順一　監修，坂本穆彦　編集，北川昌伸　編集協力：標準病理学　第３版第１刷，229―238頁．医学書院，2006年３月．
46）坂本穆彦：９ 腫瘍　1．定義と分類．坂本穆彦，北川昌伸，仁木利朗　編集標準病理学，第４版１刷．227－236頁．医学書院，2010年８月．
47）坂本穆彦：第９章　腫瘍　Ａ定義と分類　坂本穆彦監修，北川昌伸，仁木利朗　編集：標準病理学，第５版第１刷，250－259頁．医学書院，2015年３月．
48）中村恭一，坂元吾偉，坂本穆彦，土屋永壽，藤井啓二　編集：看護学生の為の病理学，第２版第１刷，Ⅶ．腫瘍，65－86頁．医学書院，1981年３月．
49）渋谷正史，山本　雅　編集：改訂　がん遺伝子研究最近の進歩，改訂２版１刷．中外医学社，1991年９月．
50）がん転移研究会　編：［続］がんの浸潤・転移研究マニュアル―実験の手技と指針―．金芳堂，1997年４月．
51）山本　雅，土田信夫，中村祐輔，藤永　薫　編集：がんと遺伝子―機能から診断・治療まで．蛋白質 核酸 酵素　42：1997, 1997年号増刊．共立出版，1997年７月．
52）鶴尾　隆，谷口維昭　編集代表，秋山　徹，宮園浩平　編集幹事：がん研究のいま［全４巻］　①発がんの分子機構と防御　②がん細胞の生物学／③がんの診断と治療　④がんの疫学．東京大学出版，2006年２月／３月．
53）日本医師会生涯教育課　編集：日本医師会雑誌　第138巻・特別号（１）生涯教育シリーズ―76．がん診療update，平成21年６月．
54）タノック，ヒル，ブリストゥ，ハリントン編，谷口直之，大島　明，鈴木敬一郎　監訳：がんのベーシックサイエンス，日本語版，第３版第１刷．メディカル・サイエンス・インターナショナル，2006年11月．
55）西條長宏，西尾和人　編著：がん化学療法・分子標的療法update，初版１刷．中外医学社，2009年10月．
56）畠　清彦　編著：がんの薬物療法マニュアル［第２版］，２版１刷．中外医学社，2014年12月．
57）デヴィータ，ローレンス，ローゼンバーグ編，宮園浩平，石川冬木，間野博行　監訳：デビータ　がんの分子生物学，第２版第１刷．メディカル・サイエンス・インターナショナル，2017年５月．
58）武藤　誠，青木正博　訳：ワインバーグ　がんの生物学　原書第２版．南江堂，2017年６月．
59）ペコリーノ　著，日合　弘，木南　凌，訳：ペコリーノ　がんの分子生物学，第３版第１刷．メディカル・サイエンス・インターナショナル，2017年８月．
60）日本臨床腫瘍学会　編集：新臨床腫瘍学　がん薬物療法専門医の為に，改訂第５版．南江堂，2018年７月．
61）田中伸哉，小田義直：９章　腫瘍　2．腫瘍の名称／3．腫瘍の形態的特徴．深山正久　編：はじめの一歩の病理学，第２版第２刷，146頁／146－47頁．羊土社，2019年２月．
62）佐藤隆美，藤原康弘，古瀬純司，大山　優　編集：がん治療エッセンシャルガイド　改訂４版，４版１刷．南山堂，2019年５月．
63）西巻はるな，小林博子，中西陽子，唐　小燕，増田しのぶ　訳：5．新生物．Hammer，McPhee原書，國分眞一朗　監訳：ハマー＆マクフィー　疾患の病態生理―臨床医学入門，原書７版，95－121頁．丸善出版，2019年６月．
64）渋谷正史，湯浅保仁　編集：がん生物学　イラストレイティド，第２版第１刷．羊土社，2019年９月．
65）早川欽哉　著：好きになる 病理学，第２版第１刷，第７講　がんの姿・形　7.1 がんとは　⑵がんの分類，85頁．講談社，2019年10月．
66）濱　敏弘　監修，青山　剛，東　加奈子，池末裕明，内田まこや，佐藤淳也，高田慎也　編集：がん化学療法レジメン管理マニュアル，第３版第２刷．医学書院，2019年12月．
67）日本臨床腫瘍学会　編集：日本臨床腫瘍薬理学，第２刷．じほう，2020年１月．
68）日本臨床腫瘍学会　編集：入門腫瘍内科学，改訂第３版．南江堂，2020年７月．
69）岡元るみ子，佐々木常雄　編集：第３版　がん化学療法副作用対策ハンドブック，第３版第２刷．羊土社，2020年６月．
70）日本臨床腫瘍薬学会　監修，遠藤一司，加藤裕芳，松井礼子　編集：改訂第６版　がん化学療法レジメンハンドブック，第６版第３刷．羊土社，2020年２月．
71）日本緩和医療学会ガイドライン統括委員会　編集：がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン2020年版，第３版第１刷．金原出版，2020年７月．
72）大西　洋，唐澤久美子，唐澤克之　編著：がん・放射線療法 2017，改訂第７版，初版第１刷．秀潤社，2017年７月。
73）加藤光保：第７章　腫瘍，腫瘍とがん：用語の基本．青笹克之　総編集　加藤光保，菅野祐幸　編集：解

明　病理学［第３版］，172頁．医歯薬出版，2017年10月．
74）堤　弘　著：新改訂クイックマスター病理学，第２版第１刷，総論　８ 腫瘍，118－134頁．サイオ出版，2018年１月．
75）高橋雅英：第６章　腫瘍 用語の定義．Kumar，Abbas，Aster　原著，豊国伸哉，高橋雅英　監訳：ロビンス基礎病理学　原書第10版　初版，205－208頁．エルゼビア・ジャパン，2018年12月．
76）橋本優子：第９章　腫瘍，A 定義と分類　①腫瘍・がん・悪性新生物：用語の定義．北川昌伸，仁木利郎　編集：標準病理学，第６版第１刷，248頁．医学書院，2019年３月．
77）勝俣範之，東　光久，後藤　悌，白井啓裕，高野利実，森　雅紀，山内照夫　編集：がん診療スタンダードマニュアル　癌薬物療法からサポーティブケアまで，第１版第１刷，第Ⅲ章　各種がんの治療．85－353頁．シーニュ，2019年12月．
78）口腔癌診療ガイドライン改訂合同委員会　日本口腔腫瘍学会/日本口腔外科学会　編：口腔癌診療ガイドライン　2019年版，第２章　疫学，13頁．金原出版，2019年10月．
79）松浦　剛：第７章　口腔腫瘍　１ 口腔がんの概要　1．口腔癌の特性．白砂兼光，古郷幹彦　編集：口腔外科学，第４版第１刷，213－215頁．医歯薬出版，2020年２月．
80）又賀　泉：第12章　腫瘍および腫瘍類似疾患　総論　A 腫瘍の概論　２悪性腫瘍について．野間弘康，瀬戸晥一　監修，内山健志，近藤壽郎，久保田英朗　編集：標準口腔外科学，第４版第２刷，245－246頁．医学書院，2018年５月．
81）河原　栄：ⅩⅢ．腫瘍．発癌のメカニズム，形態．梶原博毅，神山隆一　監，沢辺元司，長坂徹郎　編：スタンダード病理学，第４版第１刷，156－176頁．文光堂，2017年３月．
82）長塚　仁，中野敬介：Chapter12．口腔癌・口腔潜在的悪性腫瘍と口腔上皮異形成．下野正基，高田　隆，田沼順一，豊澤　悟　編集：新口腔病理学，第３版第１刷，169－181頁．医歯薬出版，2021年３月．
83）日本膵臓学会　膵癌診療ガイドライン改定委員会　編：膵癌診療ガイドライン　2019年版，第５版第２刷．金原出版，2020年11月．
84）日本肺癌学会　編：肺癌診療ガイドライン　悪性胸膜中皮腫・胸腺腫瘍含む―2020年版．第６版第１刷．金原出版，2021年１月．
85）日本膵臓学会　膵癌診療ガイドライン改定委員会　編：患者・市民・医療者をつなぐ膵がん診療ガイドライン2019年版の解説，第３版．金原出版，2020年７月．
86）日本肺癌学会　編：患者さんのための肺がんガイドブック　悪性胸膜中皮腫・胸腺腫瘍含む　2019年版．金原出版，2019年12月．
87）日本癌治療学会・日本病理学会　編：領域横断的がん取扱い規約　第１版．金原出版，2019年９月．
88）日本婦人科腫瘍学会　編：卵巣がん・卵管癌・腹膜癌治療ガイドライン　2020年版，第５版第１刷，第Ⅰ章　ガイドライン総説　Ⅲ取り扱う疾患，51頁．金原出版，2020年８月．